分厚い壁を破って女性を農村の表舞台に

地元農産物の直売や消費者との交流活動を通じて、女性の力で農村を元気に

静岡市
農業協同組合理事
JA女性部販売所
アグリロード美和代表

海野（うんの） フミ子（こ）氏

略　歴　静岡県静岡市出身。茶農家後継者と結婚。平成７年、JA静岡市美和支部の女性部支部長に就任し、女性部による朝市の開催や、農産物直売所・加工施設「アグリロード美和」の開設などを主導。地元農産物を活かした「生消菜言弁当（せいしょうなごんべんとう）」を発案・ヒットさせる。平成12年、JA静岡市の女性総代を20％にすることを実現したほか、自身もJA静岡市初の女性理事として、農協の経営・方針決定過程への女性の参画拡大に取り組む。

JA静岡市女性部販売所「アグリロード美和」

JA静岡市美和支部の女性部の朝市活動を母体として、平成10年、常設の農産物直売所「アグリロード美和」を開設。生産者と消費者が野菜について語り合う「生消菜言倶楽部（せいしょうなごんくらぶ）」を立ち上げ、消費者との交流活動や地元農産物を活かした商品開発を展開。年間約1億円を売り上げる直売所に成長している。

年表

49歳
静岡市農業協同組合（JA静岡市）美和支部の女性部支部長に就任

50歳
農産物加工センター及び朝市を開始

52歳
農産物直売所・加工施設「アグリロード美和」開設

54歳
JA静岡市女性部部長に就任。JA静岡市の総代の約20％を女性に

59歳
JA静岡市初の女性理事に就任

61歳
平成19年度（第４回）女性のチャレンジ賞受賞

夫の活躍を支える中で深まった、地域の女性たちの絆

私は農協女性部の活動を通じて、地域農業の振興や、農協の経営・方針決定過程への女性の参画拡大に長く取り組んできました。私の原点は、夫と一緒に農業をしながら、地域活動や農協という組織の中で、夫が地位を得られるよう活躍を支えていくこと、それが自分の役目だという思いでやってきました。町内会長、PTA会長、消防団長などに夫が就くと、それぞれの役職で、どんなふうに実績を上げられるかと考えました。例えば、夫が消防団長の時、消防団の県大会で優勝を目指すことになりました。そこで、団員の妻たちで集まり、団員を支えるためにはどうしたらいいか話し合いました。普通、毎日夫が練習に出かけていくとなると、嫌な顔をしたり、愚痴を言いたくなったりするものです。でも、そこを「練習がんばってね」と言って夫を送り出し、早朝の練習にはお弁当や味噌汁などを差し入れして応援しよう、女の人も愚痴を言わないようにしようと決めました。その甲斐あって、県大会では見事優勝を勝ち取りました。団員の中には、「母さんたちの支えのおかげだった」と、涙を流して喜んでくれた人もいました。こうして夫の活躍を支える中で、地域の女性たちとの団結も深まり、これが後の女性部での活動につながっていきました。

農協女性部の支部長として実績を上げ、女性を意思決定の場へ

平成7年、JA静岡市美和支部の女性部支部長にという話をいただきました。その頃、女性部では部員が減少していて、活動の活性化が急務でした。そこで、「美和の活性化検討チーム」というプロジェクトを立ち上げ、地区代表者と農協職員を中心に役員のあり方を見直したり、部員の要望を聞くためアンケートをとったりしました。

その中で、朝市をしたいという声が非常に多くありました。農産物の価格が低迷していたことや、安心・安全な農産物を消費者に提供したいという問題意識などを背景に、女性たちの熱い思いを実現したいと考え、農協に働きかけて、平成8年から朝市を始めました。平成10年には常設の直売所・加工施設「アグリロード美和」を開設し、女性たちが楽しく活動しながら、仲間づくりをするとともに、収入を得ることを目標にやってきました。消費者との交流活動にも積極的に取り組む中で、消費者の意見を取り入れた「生消菜言弁当（せいしょうなごんべんとう）」がヒットするなど、部員のがんばりのおかげで売り上げは順調に伸び、1億円を達成するまでになりました。

平成12年、JA静岡市女性部の部長に就任した時、「総代会」という農協の最高意思決定機関にオブザーバーとして出席しました。そこで、総代に女性が一人もいないことに非常に違和感を覚えました。それまではそれが当たり前で、不思議に思わなかったのですが、農業者の半分は女性が占めているのに、なぜ意思決定の場にいないのだろうか、と。そこで、総代の20％を女性にしてほしいと、農協に訴えました。502名の総代のうち20％を女性にするということは、約100名の男性に退いてもらうということですから、簡単なことではありませんでした。しかし、朝市や直売所の成功や、選挙運動でも女性部の活動が高く評価されていたことなどから、当時の組合長をはじめとして、男性たちもこれからは農協の運営に女性を入れていかなければならないと理解してくれました。こうして、総代の任期が入れ替わる時に、100名以上の女性総代が誕生しました。皆、初めて総代になるので、知識や経験の不足を補うため、農協の運営や貸借対照表の読み方、インターネットからの情報収集など、女性を対象に研修も行いました。さらに、美和地区では、総代会の前に女性総代が集まり、事前勉強会を開いてきました。100名を超える人が出席する総代会で、しかもずらりと並んだ役員の前で発言するのはとても大変なことなので、誰がどのような意見を出すかあらかじめ相談し、当日まで発表の練習をしています。男性の中には、持ち回りの役職だからと総代会を欠席する人もいますが、女性はそうではありませんから、女性総代から活発な意見が出るようになって、総代会の雰囲気も変わりました。

女性が生き生きと働ける農協に

平成17年には、JA静岡市で初の女性理事に就任しました。夫は、「女性が理事になってもあまり歓迎されないとは思うが、男と同じようにやって、報酬も好きに使えばいい」と言って、私が役職に就くことを理解してくれました。これまで夫をはじめ、家族を支えてきたことを見ていてくれた、ということもあるのだと思います。その後、国でも女性役員の登用を促進していることもあり、現在は3人の女性が理事になっています。

さらに今年、女性部から、農協の常務への立候補を要請され手を挙げましたが、「女性がなったためしがない」と言われ、当選できませんでした。これまで女性たちが活動を通じて築いた実績があるにもかかわらず、男性が就いてきたという慣習が変わることには、根強い抵抗があると感じています。

一方、JAの管理職・役員への女性登用と同時に取り組んできたのが、育児休業から復帰する女性の短時間勤務です。法律で制度があっても、実際には女性たちは職場に遠慮して、言い出せない状況がありました。ある時、大変優秀な女性が育休から復帰することになったので、「あなたなら辞めさせられることはない。一人では心細いなら、何人かで一緒に取ればいい」と後押しをし、4人の女性が短時間勤務を同時に取得しました。今ではすっかり制度が定着しています。「農協は女性が働きやすい職場」というイメージを持ってもらい、女性が生き生きと働けることはとても大事だと思っています。女性の参画拡大や、女性が働きやすい職場づくりを進めるには、古い慣習や男性の意識など、まだまだ分厚い壁がありますが、女性の力を活かし、農村を元気にするため、今後も取り組んでいきたいと思います。

（文・尾島 有美）